

# パリに集った ～ドビュッシー 没後 100 年～ 音楽家たち

モーツァルト	ピアノソナタ イ長調 K.331 (トルコ行進曲つき)
ベートーヴェン	ピアノソナタ 第8番 ハ短調「悲愴」
メンデルスゾーン	無言歌集から「甘い思い出」「春の歌」
ショパン	ワルツ Op69-1、バラード第3番
リスト	「パガニーニによる大練習曲」より 第2番 きみは花のように、夢に来ませ
フォーレ	5月、夢のあとに
ドビュッシー	映像第2集、月の光
ラヴェル	ピアノ連弾「マ・メール・ロア」から (※曲目は演奏順とは異なります。)

ピアノ	市野秀美	小川尚子	小川知子
	佐藤紗規子	鈴木 登	福永素子
ソプラノ	山西敏子		

2018. 1. 20 (土)

◆開場 17:00 ◆開演 17:30 ※19:30 終了予定

一般 2,000円 高校生以下 1,000円

清水文化会館マリナート(小ホール)

## ドビュッシー登場までの“パリの音楽サロンでは……”

2018年は、クロード・ドビュッシー（1862～1918）の没後100年にあたります。フランスの代表的な作曲家であり、今日フランス音楽と聞けば、ドビュッシーの音楽を想像される傾向があります。しかし、彼が生まれる30年ほど前のパリで、とりわけ器楽音楽において活躍したフランスの作曲家は皆無でした。商業主義、文化的流行現象、社会運動における自由競争の場となっていた当時のパリで、まずイタリアのヴァイオリニスト、パガニーニがヴィルトゥオーゾ（卓越した技巧の演奏家）としてセンセーションを巻き起こします。その後ハンガリーのリストや、ポーランドのショパン、ドイツのメンデルスゾーン、10代のクララ・シューマン等、外国のピアニスト兼作曲家が華々しく活躍し、競い合い、交流しました。音楽サロンでは、自作の作品は勿論のこと、ショパンはモーツァルトを、ベートーヴェンの孫弟子であるリストは、ベートーヴェンを好んで演奏。また400曲ものシューベルトの歌曲が仏訳され、歌われたそうです。つまりドイツ音楽が盛んに奏されたのです。

そこから少し時を経ると、ドイツ音楽の影響を強く受けたフランスの作曲家が現れます。サン＝サーンスや、その後継者としてフォーレ等です。

そしてようやくドビュッシーの登場となるのですが、彼は初期にはドイツのワーグナーの影響を受けはするものの、それまでとは全く異なった独自の作品を生み出します。ボードレー、ヴェルレーヌ、マラルメなど、詩から受けたインスピレーションを音楽に起こし、と同時に絵画的な響きを求めました。パリ万博によって知った東洋の響きによって、彼の想像力は大いに掻き立てられ、誰もが到達し得なかった響きの境地を切り開いたのです。

この演奏会では、ドビュッシーの絵画的作品の他、19世紀前半にパリで活躍し、互いに交流したショパン、リスト、メンデルスゾーンの作品及び、彼らが演奏したモーツァルトやベートーヴェン、彼らの交流によって生まれた作品（例えばリスト作曲ハイネ作詞：君は花のように）。その後にドイツ音楽の影響を受けたフォーレの作品、ドビュッシーと双璧を成すフランスの代表的作曲家、ラヴェルの作品をお聴き頂きます。

